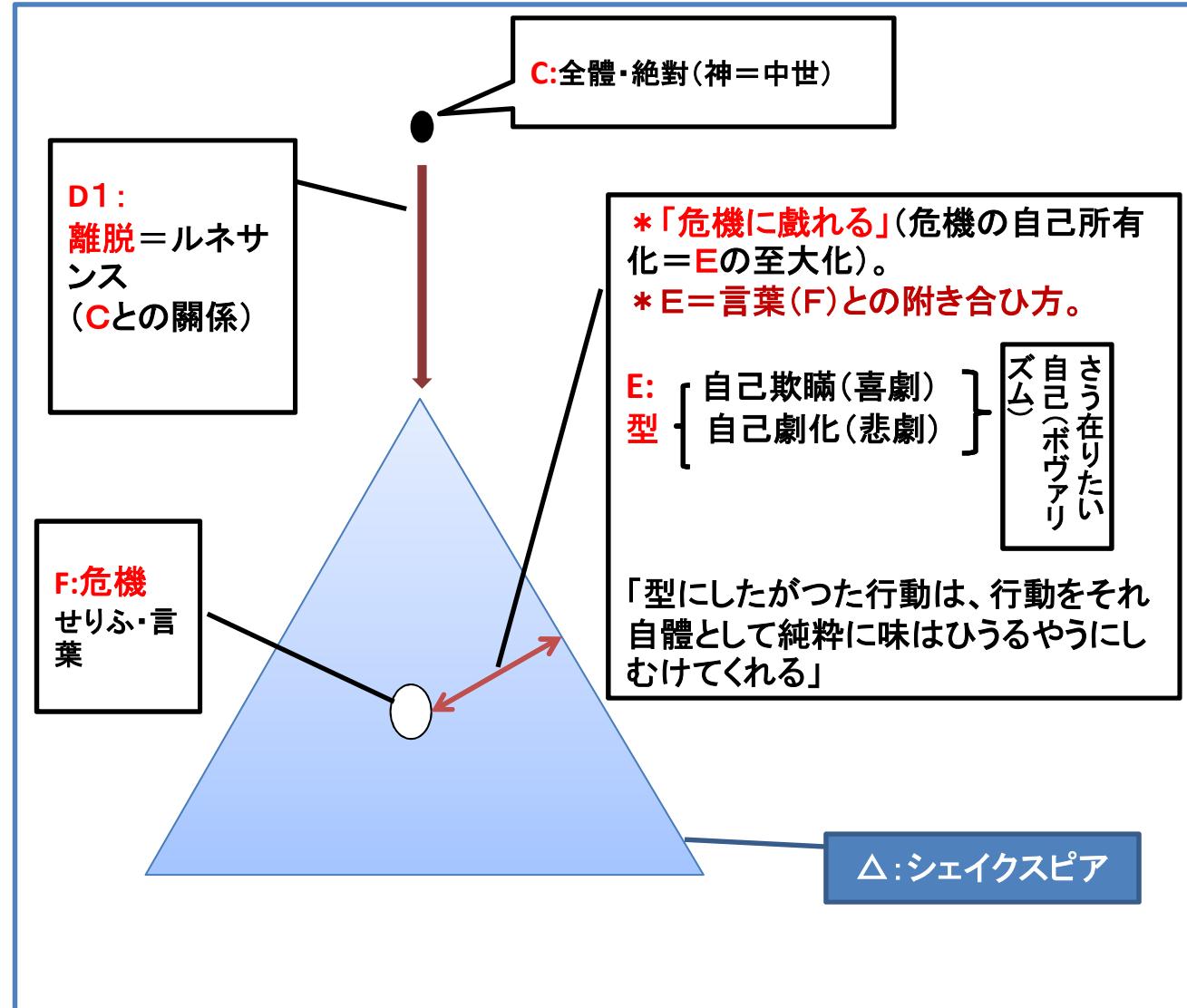


「彼(シェイクスピア)が劇場に期待したことは、危機から自分を救ひ出すことではなく、危機と戯れることであつた。シェイクスピアのせりふが詩でありえたのは、そしてその詩がせりふでありえたのは、彼が言葉といふものを危機の表明や解決の通路としてではなく、その中に危機を呼び入れ、それと戯れるための場として把握してゐたからである」…とは以下図(説明は右項)の様に捉へられる。



〔「せりふの中に危機を呼び入れる」「危機に戯れる」〕とは以下の様に換言出来る。…

\* 場(C)から生ずる「関係(D1)と稱する實在物(離脱)は潜在的には一つのせりふ(言葉)によつて表し得る」。故にその言葉との附き合ひ方、即ち「型にしたがつた行動」による言葉(危機)の自己所有化で、関係(離脱)への適應正常(危機に戯れる)が叶へられる。(全七P300『せりふと動き』文を利用)

~~~~~

参照文:

\* 場から生ずる「関係(D1)と稱する實在物は潜在的には一つのせりふ(言葉)によつて表し得る」(全七P300『せりふと動き』)。

\* 場から生ずる「心の動き(関係)を形のある『物』として見せるのがせりふの力學」(『せりふと動き』)。

\* この二つを合はせ要略するとかうなる。せりふ(言葉:F)との附合ひ方、扱ひ方(E)、即ち「フレイジング」「so called=所謂何々」「型にしたがつた行動」の用ゐ方の適不適で、場との関係(D1)を適應正常化(非沈湎)させる事が可能となり、また反対に適應異常(沈湎)に陥らせる事にもなり得る。